

御嶽神社あれこれ

日本人形玩具学会会員 齋藤 慎一

御嶽神社の大鎧と五月人形の鎧

現在、私たちが五月節句に飾る鎧は、鎌倉時代の「大鎧」と呼ばれる様式のもの、源義経や畠山重忠の勇姿をイメージさせる甲冑です。

鎌倉時代の四方に足のついた唐櫃という箱の上に掛台を置き、大鎧の胴（左右の大袖・鳩尾・梅檀板・大袖左右の下に「籠手」をとりつけ、脇櫃もつけた）を掛けます。「脇櫃」をつけ、足許に「脛当」「毛沓」を揃えます。「籠手」以下は「小具足」といいます。兜と面頬をつける、まるで人間が肘を張って威張っている姿です。しかしこれは、江戸時代以来の置き方、飾り方です。

が内側にたたみこまれるので、前の方は「弦走草」で多少せかれるので立ち上がるのですが、全体が提灯みたいに内側にたたみ込まれて平たくなります。そこに脇櫃をよせかけて兜を上につけて、う姿で描かれて、人間が座っているように飾らなかつた。むろん掛け台もない。掛けっぱなしにすると、威糸や威章が延びてしまいます。「籠手」以下は別にまとめて身に付けるのです。その後まにまとめて身に付けるのです。その後まにまとめて身に付けるのです。その後まにまとめて身に付けるのです。

中世は、大袖・梅檀板・鳩尾板のついた大鎧の胴に脇櫃を添えて、兜をその上に掛け台なしで平たく置くのです。

こういう置き方は、平安末期の中尊寺旧蔵、大般若経一八二巻の見返しの仏画、鎌倉時代の絵巻物「粉河寺縁起絵巻」「平治物語絵巻（六波羅行幸巻）」、実景を写した記録「蒙古襲来絵詞（一二九三年成立）」「武蔵武士風俗「男衾三郎絵詞」」に描かれています。この時代の大鎧は、胴

中世の武士たちは、絶えず「夜討、強盗」昼夜を問わない所領の侵犯にさらされ、それを実力で防ぐ職能人です。大鎧をたごたご飾り付けるなどしていらぬのです。すぐに着用できることが大切だった不穏な時代だったのです。皆さん、古文で習った「馬盗人（今昔物語）」に活写された源氏の武士父子の胸のすくような機敏な行動力、そして守護の警察権「大犯三箇条」（貞永式目）を思い出して下さい。

この時代の大鎧は構造的に未発達で小札の板を「側」として、威糸で連ねているだけの構造でした。それを側の縦へのゆるぎ（あがき）を裏面から「あがき止め」の草で各段数力所でかたく結び止めて、側を緊縛し運動しやすいつくろにしたりが中世後期の胴丸・腹巻（疾走用の甲冑）です。そして当世具足は胴が数枚の立胴になるまで進歩する。さらに進歩して肩が鉄板になって、負荷を背で受けて腰で受け止めることができたのです。この完成した例が、前回の五十七号の宝物シリーズ31「金小札段威二枚胴具足」なのです。「立胴」という構造の甲冑で、肩が楽になつて運動機能抜群になったのです。皆さん、皆さんのお宅の五月人形の「大鎧」は、多分掛け台に掛かなくてもよい、多分あがきを止めた立胴のはずです。要するに、見かけは鎌倉時代の姿なのに、近世に完成した当世具足の構造なのです。そして中世にはしなかつた「小具足」一式を取り付けて、飾ります。

これは江戸時代に、天下泰平、二百五十年間内にも外にも戦争をしなかつた、実に理想的な平和時代に、武技を實踐できなかった武士が、その権威を誇示する飾り方だったんです。御嶽神社に二度目の上覧の享保十六年五月八日文书（金井家文书・巻二・四一六）で、「二領の鎧に「籠手」「腰立」など一式があるかどうか調べよ」と寺社奉行が下命しています。中世の鎧を数領みている古鎧の研究者であった吉宗でさえ、また役人たちも中世の鎧が、小具足は鎧本体とは一緒にしていないという習慣を知らなかつたからです。当世具足がいつも小具足と一緒にあることに見慣れていたからでしょう。御嶽の神主さんたちは、翌日すぐに返答書（金井家文书・巻の二・四二七）で古来よりございませんと返答しています。一年に一度の神事に神主さんたちは大鎧と共に当世具足も取り出しているわけですから、当世具足は一式揃っているのに、何故大鎧にはないのかと思つたこととありますが「古来より無之」という返事は、結論として正しいのです。皆さん、お節句の大鎧が江戸式だといふのでがっかりしてはいけません。鎌倉武士から戦国時代まで、戦争態勢で生きてきた時代、そして天下惣無事令で鎮静、江戸時代に本格的な天下泰平二百五十年、あわせて八百五十年の武士の歴史事情を、甲冑の構造・構成の変化を、五月人形の「大鎧」に確認できるのです。

第四十九回 武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

応募総数 三百三十六句

選者 暮目良雨

特選

底冷えの百畳固き御師の宿
蟻地獄あり宿坊の長屋門
金亀虫重忠像に体当り
御師の吹く笛にストーブ燃え盛る
行衣干す雫下萌はじまれる

八王子市 高井美智子
狭山市 古谷彰宏
日の出町 渡邊敏雄
渋谷区 山岸美代子
狭山市 古谷多賀子

秀逸

宿坊の障子洩れくる笛の音
郭公や昼を灯ともす御師が家
新年の願ひは絵馬に筆太に
権禰宜の印ふるはせて瀧しぶき
冬桜板碑ひしめく御嶽みち
鳶の輪の眼下に見えて冬もみぢ
すくと立つ神代櫻冬日浴ぶ
夕星や神代櫻冬ともし
山桜御岳に沈む夕日かな
報賽の初穂捧げて御師の宿

墨田区 坂下千枝子
青梅市 津布久信雄
新座市 長谷川 栄
日の出町 渡邊敏雄
世田谷区 堀井より子
新宿区 田中里香
八王子市 萩原まさこ
八王子市 網倉階子
大田区 前田裕太
宮城野原郡 我妻 遼

佳作

網戸ごしひぐらしを聞く夕餉かな
紅葉かつ散る愛犬とケールブルカー
虫の音を聴き入り上る御岳道
たきちかくエアコンいらすずしいな
妣を想いて登る夏御嶽
蕎麦で飲む山の氣涼し本直し
山どりの尾を思わせる長い夜
秋晴れの武蔵望みて御嶽山
奥宮へ秋海棠に招かれり
狼の遠吠え想う初旭

高津区 齊藤紀子
川口市 井上裕太
世田谷区 馬場晋一
東大和市 石井愛乃
豊島区 高野千尋
練馬区 川村能正
中野区 加藤崇之
練馬区 下橋美織
大田区 佐藤啓三
青梅市 久保田亨

選者吟 萬緑のかなめ神代櫻立つ

奉納俳句選評

底冷えの百畳固き御師の宿 高井美智子

山地の狭隘な土地に建てられている御師の宿なので百畳敷は一間百畳でなく合わせて百畳で十分だろう。そのどれもが底冷えしていて固く感じられる。冬期の厳しい生活がこの一語に籠められる。連綿と続く信仰と修行のお山の実態を活写している。

蟻地獄あり宿坊の長屋門 古谷彰宏

蟻地獄とはなんと大仰な名前だろう。正体は薄羽蜂の幼虫の食卓である。すり鉢状になっていて一旦乗ると抜け出すことが出来ず捕食されてしまう。宿坊の中に入れば信仰と修行で身を守れるが、門の外の俗界は地獄が待っているぞと暗示しているようだ。

金亀虫重忠像に体当り 渡邊敏雄

板東武者の誉れの高い畠山重忠は鎌倉幕府誕生に貢献したが、初めは反頼朝で途中から親頼朝となったため、疑いの目をかけられ最後は幕府に討たれた。清廉潔白な人格を慕い後世の人は重忠を慕った。金亀子と重忠の戦ごっこが微笑ましく平和の時代に相応しい。

御師の吹く笛にストーブ燃え盛る 山岸美代子

神社に参詣する人々をお世話する御師は、神社専属のコンシェルジュとも言える。山伏姿で法螺貝を吹く姿で知られるが、神楽にも関わるので、笛も得意だ。力強い笛に合わせストーブも燃え盛る、現代の御師の宿の一面を写生した。

行衣干す雫下萌はじまれる 古谷多賀子

行を終えて洗われた行衣から雫がしたり落ちている。地面を見ると濡れたりは下萌が始まっている。春になると多くの参詣者が集まり、お山は賑わいを増すことであろう。春先の静かな御師の宿の一幕。

第五十回

奉納俳句募集要項

- 一、作品は未発表に限る。
一、受付は指定用紙にて投句箱へとする（郵送等直接の受付は致しません）
一、締切り 令和五年一月十五日
一、発表 令和五年三月中旬
四季を通じて「御岳山を題材」とした俳句を募集しております。
大勢の方の投句をお待ちしております。